A Consideration about the Life-Long Sport

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Okubo, Hideaki, Enomoto, Masayuki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9620

生涯スポーツ試論

大久保英哲，榎本　雅之

A Consideration about the Life-Long Sport

Hideaki OKUBO，Masayuki ENOMOTO

はじめに

本稿は平成 10 年まで大久保英哲が担当してきた金沢大学社会教育主事講習の講義や各種の生涯スポーツに関する講演をまとめたものである。一連の講義・講演内容は一般的な生涯スポーツ論とはやや趣を異にした異説と受け取られ，それ故に興味を持たれもしたが，その内容をまとまった論として読みたいという受講者からの要望に応える形で今回収録したものである。そのため一般的な学術論文の体裁を取っていないことを先ずお断りしておきたい。なお，こうしたテープ起こしや原稿の加筆修正，文献一覧等の作成は榎本雅之が担当している。元来が講演原稿であるため，繰り返しや引用・参考文献等にやや正確性を欠いていることは否めないが，それでもなお読みやすくなっているとすれば，それはひとえに彼の功績による。

またこの試論には，大久保が 1970 年代にその謦咳に接した早稲田大学川原栄峰教授の哲学やお考えに大きな影響を受けていることを述べておきたい。川原先生はハイデッガーやニーチェ哲学の研究者であり，もとより私は門外漢であった。「勉強したいならいらっしゃい」と気軽に声をかけていただいて，厚かましくもそうそうたる川原ゼミの院生や卒業生たちが集まった『権力の意志』など原典を学ぶ哲学ゼミナールの末席にちょこんと座っていただけなのである。さすがに 1 年ちょっとで失礼させていただいた。

川原先生は勿論スポーツや体育に直接的な言及をされることはなかったのであるが，ニーチェやハイデッガーの哲学を通して人間や時間とは何かを語られた時，それが教育や体育・スポーツと密接な関わりを持っていることに気づかされた。そのことが私自身にとってはとてつもない大きな驚きであり，また私自身のその後の人生や教育，体育やスポーツの考え方にあまりにも大きな影響を受け取ったがために，30 年近く経った今ではどこからどこまでが川原先生の哲学であり，私が付け加えた部分がどこなのかが判然としない程である。「そんなことはずっと昔から私が言っていたことですよ。まだそんなところにいるのですか」。川原先生の苦笑が目に浮かぶようであるが，30 年近くかけてもまだこの程度にしかなれない現状を率直に示して，その学恩に感謝申し上げたい。

I　生涯学習

1　死ぬまで勉強させられる？

生涯スポーツのための基礎理論を読むと，様々な学問領域のキーワードになっている用語が生涯教育であることに気づく。

周知のように生涯教育という概念は，ポール・ラングランの名を出す迄もなく，1960 年代以後急速に世界に広まり，わが国では 1970 年代に社会教育の原理的在り方を示すものとして承認され，さらに 1980 年代からは教育全体の基本原理であると認識されて今日に至っている。(岡本包治・山本恒雄編『生涯教育とは何か』) 日本ではその契機は 1981 (昭和 56) 年の中央審議会答申「生涯教育について」に始まるために先ず

平成 19 年 10 月 1 日受理

この答申を確認しておこう。

人間が生涯を通じて資質・能力を伸ばし，主体的な成長発達を続けていくうえで教育は重要な役割を担っている。今日，人々が自己の充実や生活の向上のため，その自発的意志に基づき，必要に応じ自己に適した手段・方法を自ら選んで行なう学習が生涯学習であり，この生涯学習のために社会の様々な教育機能を相互の関連性を考慮しつつ，総合的に整備・充実しようとするのが生涯教育の考え方である。（文部省，生涯教育中央教育審議会答申，３頁）

「人が平和で幸せな一生を送るには死ぬまで教育が大切であって，そのために勉強したいという人たちのために，行政や教育関係者の側はそれに応じた条件を整えるようにしましょう。」というのが，上の答申の私の読み方である。この答申を受けて，文部省が生涯学習局を昭和61年に設置し，石川県が平成５年度から生涯学習課を設置する等，国や地方自治体の行政が生涯教育の条件整備に本格的に取り組むようになり，生涯教育が行政ベースで進められるようになった。

答申には「自発的な意思」と書かれてあるから，勉強したい人はどうぞおやり下さい，行政は積極的に援助しますよというのが本来の意味であろう。地方教育委員会に社会教育主事という制度があり人材が配置されているが，これはまさに行政の側のそうしたお世話をする係のことをいうのであろう。日本の行政は実に細かいところまで痒いところに手が届くような世話をやいてくれるものである。ありがたい話である。そこには何の問題もないように見える。だが，どうしてそのような自発的・個人的な意志に行政が世話をやきたがるのだろうか。行政の側にはそのようなお世話をやかなければならない理由が何かあるのだろうか。そもそも人間の「自己の充実や生活の向上」，つまり平たいことばで言うならば幸福な人生を送るためには，本当に教育や学習は不可欠なものなのだろうか。それがないと幸せな人生は全うできないのだろうか。

生涯学習が必要な理由を答申は次のように言う。

「このような生涯教育が重視されるようになった背景としては，(1) 科学技術の進歩や国際関係の緊密化などの社会・経済の急速な変化に伴う適切な対応の必要性，(2) 人々の教育的・文化的要求そのものの増大，(3) 所得水準の向上や労働時間の短縮，あるいは寿命の延長による人々の経済的・時間的ゆとりの増加，(4) 自由な活力ある社会を築いていく上での適切な教育的対応の必要性などが挙げられる。」

なるほどこれらの四つは生涯教育が必要になってきている事情を説明している。ことに科学技術の進歩に代表される世の中の変化に取り残されないようにするために一生勉強が必要なのだという説明は実に説得力のある理論だとしか言いようがない。そのように言われれば一言もないという気分にさせられてしまう。確かに，現代では自動車の知識や運転はおろか，コンピューターや様々な電子機器を使いこなす知識や技能が必要な時代である。

だが教育史の上からは，現代は既に人類史上最も長い教育を受けさせられている時代である。日本の場合，明治５年に「学制」が出されて近代教育が出発したのであるが，最初の義務教育は基本的に４年，後明治40年に６年，昭和16年国民学校令により８年，昭和22年から現行の９年に延長されてきた。（『日本近代教育史事典』169～180頁）そして今や高等学校もほぼ95パーセントの進学率，すなわち事実上の義務教育なのであり，大学進学率さえも70パーセントの時代なのである。

こうした高校生，大学生のうち，昔も今も勉強が好きで，たいへんよく勉強する層が一定程度存在することは間違いない。例えば私がまだ大学生の 1970 年代のはじめ，ドイツ留学から

帰ってこられた教授が，日本の大学生の現状を嘆きながら，ドイツの大学はよく勉強して実に気持ちが良いと言われたものである。しかしながらドイツの大学進学率は当時約 30 パーセントしかなかったのであり，進学率が 70 パーセントを超えて大学が大衆化されている日本とは比較にならないエリート層の大学だったのである。そうした大学では教える側も学ぶ側も気持ちがよいのは当たり前なのである。現在の日本では大学ですら全ての学生たちが向学心に燃えて勉強しているのでないことは，大学のすぐ近くにレジャー施設がたくさんあることを見ればわかることであり，すでによく知られていることである。ましてや高等学校においてをやである。95 パーセントが進学する高等学校の生徒たちの相当部分は勉強意欲に燃えて自発的に進学するというよりも，社会的な強制力，圧力のもとで学校に行かされているのだと考えた方が，物事の本質を見る上でははるかに肝要である。そのような人たちにとって，学校教育の時期は忍耐の時期，牢獄の時期といって差支えない。

ようやく，高校なり短大なり大学なりのそうした時期が終わったと思ってほっとしていたら，今度はお役所が生涯学習という妙なお節介をやき始めて，一生勉強しろというようなことを言い始めている。ようやく学校教育から解放されたと思ったら，今度は死ぬまでエンドレスの勉強だという。もう大概いいかげんにしてくれ，余計なお節介はしないでくれ。というのがあまり勉強の好きでない，私も含めた多くの人々の率直な気持ちではないだろうか。そもそも死ぬまで勉強しなければ幸せに生きられないならば，それは社会のあり方としては望ましい姿ではないのではないか。だからなぜ行政が生涯学習ということをこれほど重要視しなければならないのだろうかという根本的な疑問がやはり生涯学習や生涯スポーツという勉強の出発点にならねばならないのである。

先程，こうした現象を生じさせているのは社会的な強制力だと言った。それは何かというと，実は「時間」ということであると言い換えることができる。

2　長い時間（Langeweile）

こうした仕事もなく，することもない時間をドイツ語で Langeweile（長い時間）と言う。川原栄峰先生は「退屈」と訳されている。「空虚に放置されっぱなしの時，人は退屈する。すると人は娯楽に走ってこの空虚な時間を埋めようとする。」ハイデッガーは半世紀も前にこう言っているというのである（川原栄峰『ハイデッガーの哲学と日本』103-130 頁）。この空虚な長い時間・「退屈」からの逃亡は，レジャー問題だけにはとどまらない。家庭内の諸問題から始まって，教育問題，少年非行問題，老人問題全てに関わっている。したがってこれらはすべて政治経済に直結するために，いわば国をあげて，国家レベルでこれに対処しなければならない。これを怠ると社会不安に陥る。

たとえば，日本は東京の夜を女性がひとり歩きできるほどに世界一安全な国であるなどといわれる。このことには教育問題が深く関わっているのである。もし今仮に，高等学校の数を半分か三分の一にして，本当に勉強の好きな青年だけを受け入れるだけにする。この学校の生徒も先生もたいへん気持ちのよい勉強や指導ができることは間違いない。けれども，そこからはみ出した青年たちはいったいどうなるであろうか。前にも言ったように，中学卒業くらいの若者はアルバイト程度の一時作業は別にして，基本的に現代日本の労働システムには組み込まれておらず，除外され弾き出されているのである（「不要になった若者」）。そのようにして働く場からも学校からも弾き出された彼らは，社会から何もさせてもらえない少年として巷を徘徊せざるを得なくなる。性的にも身体的にも人生で最も体力があり，そして社会的な経験が少ないこうした若者が，何をするかは言わずとも知れたことである。少年非行の深淵の理由である。

彼らが社会に受け入れてもらえるまでの「長

い時間」，それでは何をしていればよいのであろうか。実は，学校というのはそうした若者の「長い時間」を吸収する社会的な文化装置であると考えることが，苦いけれども真実の姿なのではないだろうか。もともと勉強したくて来ているのではない若者を，ともかく脇道に外れないようになだめたり励ましたりしながら勉強させるというのはたいへんな仕事である。昭和40年代の終わり頃，私は東京近県のある高等学校で講師を経験した。当時の偏差値輪切り進学体制の中では下位に位置する学校であった。そこで行なわれていた教育は，何とかして生徒たちの長い時間（川原栄峰流に言えば「退屈」）（Langeweile）を吸い取ってやろうとしている懸命の試みと考えたほうがよく理解できるものであった。授業を「飽きさせないで受けてもらう」ための様々な工夫，放課後や休日に行なう部活動の練習，あるいは試合の指導。生徒の「長い時間」に付き合うための先生方の時間もそれにつれて長く，ほとんど無償かつ無私に近く，その献身的な奉仕は学問や技術の指導者というよりは，人間的な牽引力を持って導いていく宗教家に近い仕事なのではないかとさえ思えるほどであった。そのようにして，日夜苦労しておられる教師集団の存在のおかげで，東京の夜は安全だなどと言っていることができるのだということを日本の社会はやはりきちんと認識すべきなのである。

家庭の主婦の不倫ドラマ。家事や子育てから解放された後の長い時間。そしてカルチャーセンター。これも同じ根から生じた現象である。そして，これから迎える高齢化社会。同じ根は老人社会にどのような現象を現わし，それに我々はどう対処すべきなのであろうか。

さらに，働く場を与えてもらえる年齢層の人々も，あるいは学校教育の中にある人々も，基本的な人間の生き方，存在のしかたの問題としてLangeweileを問題にしないわけにはいかないし，あるいはまた現実的にも週休二日制の関連でLangeweileを問題にしないわけにはいかないのである。ただこの層に属する人々は社会化された組織や人間関係の中で，問題を深刻化させないでいられるだけなのである。

3　生涯学習指導者の役割

このように見てみると，テクノロジーの発達に伴う現代社会のもたらしたLangeweile「長い時間」，つまり空虚な時間，ありていに言うならば「暇」あるいは「退屈」を社会的に望ましい形で吸い取る社会的な文化装置が，生涯学習といわれるものであり，生涯学習の指導者，例えば社会教育主事というのはそうした装置のオペレーターであるということができる。あるいは別な言い方をするならば，テクノロジーの発達に伴う自由時間の増大が余りに急激すぎて，それを使いこなす人間の能力が追いつかない状態なのである。生涯学習指導者はそうした人間の能力を開発する役割を期待されているのだと言ってよいかもしれない。

「小人閑居して不善を為す。」「人心をして倦まざらしめんことを要す。」このことは昔から辛口の，しかし人間を語る真実の言葉として知られていたのである。

4　スコレー

さて，こうした「長い時間」の問題は現代社会に急に出現したというわけではない。人間の生き方に関わる問題であるから，人類の出現した200万年も前からあったはずのことである。その中から現代の我々に参考になる事例を古代ギリシャに見てみよう。

古代ギリシャ時代の貴族は，ちょうど我々のような「長い時間」を持っていた。というのは古代ギリシャの社会は奴隷に労働させて，貴族は政治と軍事にだけ関わっておればよかったからである。アリストテレスは人生の目的は暇を得ることだと言った。暇というのは要するに，あくせくと生きるために労働するのではないということである。この暇はスコレーと呼ばれたが，英語のスクールの語源になっていることか

ら分かるように，古代ギリシャの貴族たちは，働くことをせず，暇な時間をスクールで過ごすことに人生の価値を見いだしていた。現代でも学校，なかんずく大学というところは暇な人たちが集まっているところである。だが，暇というのは働かなくてもよい，つまり高校を出て経済的な事情から働かなければならない必要性から免れている裕福さを持ち合わせていることを意味する。古代ギリシャではスクールで哲学や数学，音楽や体育といった学問や芸術を行なっていた。その水準は現代学問を基礎づけているほどの高さに達したのである。

さて，こうしたギリシャの貴族の自由時間（スコレー）は，今やわが国では多くの人々の手に入ってきている。長い時間（スコレー）を持った現代の人々が，そのエネルギーを無為に過ごせば社会問題になりかねないけれども，スクールという名の学問や芸術，体育やスポーツに向けていけば，新しい文化や学問の可能性が生れる。生涯学習という発想はこうした点から生れたものであるということができる。だが実用の学と違って，学問のための学問，芸術のための芸術は考えてみると難しいことである。それは繰り返しなされる高校生や大学生たちの学問の意味を問う様々な行為の中にシンボリックに示される。だから実用を離れて生涯学習するということは実はそんなに簡単なことではないということも頭の中に入れておかねばならないであろう。

今日のテクノロジーの発達は，人間に替わるコンピューターや機械の労働による生産性の向上をもたらした。儲けすぎるほど働くことは罪悪だとされて，労働時間が短縮され，週休二日制になり，休日の増加をもたらした。その結果，日本人の海外旅行は世界にその名をとどろかせ，日本全国津々浦々どこもかしこも観光地になって，レジャーが氾濫し，ゴルフ場開発，リゾート開発，テレビ，週刊誌，プロ野球からＪリーグ，各種の博覧会やフェスティバル，ワールドカップや 2008 年北京オリンピックに至るまでさまざまな現象を生み出している。このことで動くお金はおそらくたいへんな金額であり，企業や経済界，或いは行政が関心を寄せないはずはない。現にパチンコ業界は年間国家予算のおよそ半分に匹敵する 30 兆円を売り上げるのだそうである。

ここで大事なことは，ではなぜ人間がそのようなレジャー行動を取るのかを考えることである。

その力の一つは今日の社会変化の方向性である。今日のテクノロジーの発達はコンピューターやロボットなどの機械に仕事をさせて人間を労働から解放する，即ち時間，それも自由な時間，誤解を恐れずに言えば，暇な時間をどんどん増やす形で進んでいるのだと考えることができる。さらにテクノロジーの発達は医療技術も進歩させ，長寿命の社会も生み出した。つまり現代のテクノロジーの発達に依拠する社会変化の必然的な方向性として，人の寿命は伸びつつ，同時に日常の暇も増加するのである。ただしその暇は全ての人間に一様に配分されるわけではない。暇でないということを今仮に仕事があるという形に単純化して考えてみると，この世の中で仕事を与えてもらえない人は先ず年寄と若者，それに婦人ということになるであろう。

若者が働かせてもらえないというのは，たとえば現代では中学卒業者には特別な場合を除いて，社会的にも経済的にもまっとうな評価を得られる仕事は少ないということを考えればよい。こうした現状を改めて若者に働く場を与えると，おそらくは今度は定年を早くせざるを得なくなって，中高年世代が困ることになるであろう。家事労働もテクノロジーの進歩で機械がやってくれるようになって，主婦の時間が自由になっていることは，カルチャースクールやフィットネスクラブのかなりの部分が家事・育児から解放された女性層を対象にしていることを見れば理解できることである。

それは定年退職に伴って仕事から解放された中高年層や寿命の伸びによって老人にも同様の

現象を引き起こす。すなわちグランドゴルフや中高年登山ブーム，フルムーン旅行の隆盛である。

こうして，現代の人間は寿命が長くなる一方で，人生の早い時期，即ち少年期・青年期と，人生の後半部分即ち60歳以後の定年後の時期，それに女性にあっては，子育て以後の比較的長い時期が加わるのであるが，その暇な時間をどう生きていくかが個人の人間にとっても或いは社会にとっても大きな問題となってくる。

Ⅱ　生涯スポーツ

1　「生涯」とライフステージ

さて，生涯スポーツと言うときの生涯とは何かを考えておこう。生涯とはlife-longのことである。life-long friendといったように使う。つまり元来は時系列の概念であり，社会体育とかニュースポーツとかの地域や領域を示す空間系列の概念とは違うことに注意しなければならない。人生の各ライフステージで行うスポーツという意味であり，高齢者スポーツとか市民スポーツ，婦人スポーツということを全て包含する概念である。私はライフステージということを中世フランスのお坊さんが書いたといわれる本（新倉俊一訳『結婚十五の歓び』岩波文庫，1979）を元に，人間の一生を6歳ずつに区分して12ヶ月に当てはめると分かり易いと考えている。それは次のとおりである。

一月。この世に生を受けてからの6年間。正月のめでたさとうれしさとに象徴される時期。こども時代を最も奔放に生きる時期。

二月。7歳から12歳。季節も最も厳しい。学校教育を受け始める辛い時期。身体も成長するが，各機能によって千差万別。まだまだ未完成だが神経系統完成期ではある。来るべき春に向けて植物も人間も土の中で根が活動し始め，エネルギーを蓄える大事な時期。寒さの中に咲く梅の花は愛らしくけなげである。人間にとって基本的な運動を学ぶ時期。

三月。13～18歳。植物も人間も春を迎えて生き生きと活動を始める時期。気の早い桜は早くも花開かせ始める。身体も急速に成長し，かつ学校期にあたるために生活や時間を心配せずに人生のうちでも比較的強度の強い運動やスポーツを楽しめる時期。

四月。19～24歳。春爛漫の美しい季節。同時に卒業・入学・就職・転勤などで不安と期待とが交錯する多少落ちつかない時期。が体力的には最も充実した時期であり，多くの人はこの時期に最強の体力とスポーツを楽しむことができる。

五月。25～30歳。五月の爽やかな季節。結婚やこどもの誕生など人生の美しさを喜びにできる時期。

六月。31～36歳。人生の梅雨時。仕事も家庭も子育てももうひとつじめじめしてうっとうしいが，梅雨の晴れ間には明るい太陽も望める。菖蒲やあやめのしっとりした美しさも見られる時期。

七月。37～42歳。ようやく梅雨も明けてほっとするが，途端に真夏の強烈な太陽に照らされる。が最もエネルギーに溢れた生命活動の盛んな時期。ひまわりや朝顔の花のあざやかな原色が似合う時期。

八月。43～48歳。やはり生命活動エネルギーは旺盛だが，やや夏ばてもする時期。お墓参りもして自分の人生の行く末も考え始める時期。百日紅の赤い花の美しさに時々秋風がたつ。

九月。49～54歳。昼の残暑に悩まされながらも陽が落ちるとめっきり凌ぎやすくなる。取り入れの準備をする時期。

十月。55～60歳。収穫の時期。爽やかな秋空に収穫の喜びが広がる時期。行楽にもスポーツにも秋の夜長を楽しむにも良い時期。

十一月。61～66歳。様々な収穫を味わいながら，文化の香りを楽しむ時期。取り入れ後のゆとりを楽しむ時期。菊の香りの時期。冬支度の準備もぼちぼち。

十二月。67～（72歳）。一年の総決算と新年を迎える準備の時期。

人生をこのように六歳区分して 12 ヶ月のカレンダーにすると，ライフステージのイメージが明瞭になる。生涯スポーツというのは各季節に咲く花のように，それぞれのライフステージに合った最適のスポーツ生活を送りましょうということなのである。各ステージが全て最強のチャンピオンスポーツである必要はないし，必ずしも一つのスポーツ種目で通さなければならない必要性もない。生涯スポーツはこうした長期的な時間を視野に入れた指導を必要とする。この点で現在行われている各段階のスポーツ指導は，全ライフステージを通観する視点を必ずしも持っていないように見える。例えば小学生は二月，中学生・高校生は三月に相当するのだが，そこではたいてい自己完結的な最強のチャンピオンをめざしたスポーツ指導が行われている。しかし仮にそこで優勝しようとも，生徒が燃え尽きてスポーツを離れてしまうようでは，生涯スポーツの観点から言うならば，その指導は成功しているとは言えないのである。

2　スポーツの機能

さて生涯スポーツはこれを行えばどのような面で人間の活性化をもたらしてくれるのであろうか。

（1）健康・体力

これは言うまでもなくスポーツの身体運動効果がもたらす直接的な効用である。経験的にも実感しやすいために，スポーツの動機の第一に多くの人はこれをあげる。が，もちろんスポーツは健康にも寄与するが，その機能は本来的には副次的である。スポーツというのはそれ自体の興奮を楽しむのであって，健康のためにするのは既に不健康や病人の治療もしくはリハビリテーションである。むしろおもしろいがためにスポーツのやり過ぎは健康を害しますというべきであろう。

（2）友人・仲間・一体感・コミュニケーション

スポーツは多くの場合，他人との競い合いを前提にしている。仲間や集団でいる時のある種の不安や喜びに満ちた緊張や興奮は人間の本源的な欲求に基づいている。スポーツの場面はこうした友人や仲間を得る，またその所属する集団の一体感の興奮を感得させる極めて有効な社会装置である。

（3）自己実現

スポーツをしている大学生にその理由を問うと，たいてい言葉に詰まって「面白いから」「勝ちたいから」といった不明瞭な答えしか返ってこない。そこで「一日のうちで何をしている時に一番生きているという実感を持てるか」と聞き直すと，たいていの学生は「部活動」と答える。勉強している時と答える学生は極めてまれである。美味しいものを食べている時もそうらしいのだが，残念ながらこれは長続きしない。部活動でのスポーツ活動というのは時間や練習内容も厳格でしかも高度である。人間関係でも様々な抑圧がかかるし，試合にでもなればたいへんな心理的緊張や圧力をうける。が，その時が一番「生きている」実感があるというのである。こうした「生きている」といった実感は，「自己実現」（アイデンティテイ）と言われる。スポーツは確かにその中で自己を確認する，つまり「生きている」実感を得る機会を豊富に提供してくれるのである。

（4）宗教機能

ここで言う宗教的な機能とは葬儀や結婚などの儀式と違って抽象的な意味である。自己を超える偉大な存在，不思議な存在，崇高な存在，そのようなものに相対した時に人間は畏敬の念をいだき感動し，心が洗われる思いがする。「聖なる感覚」，「ありがたい感覚」を覚える。元旦の太陽は何か「清い」不思議な感覚を引き起こすし，葬儀のお坊さんのお経は「ありがたい」お経のような気がする。たぶん昔に遡れば遡るほど人々はそのような感覚を大事にし，また日常的に接してきたに違いない。ことに人間の生死や病気，結婚などは人智を超えたものとして神仏へ帰依せざるを得なかった。だから神社に

詣でてかしわ手を打つ時には現代の我々以上に神々しさの感覚，この世ならぬ感動に浸っていたはずである。

体外受精，エイズ予防のためにコンドームとは何かを子どもに教えねばならない現代では，病気も生死の一部も人為に属することになってしまった。理解不能な現象は知識の不足であるとされ，素朴に畏敬の念をいだき感動するという機会が現代ではめっきり少なくなったのである。

今や，かつて果たしていた宗教的な機能，すなわち自分を超えたもの，この世ならぬ美しいもの，崇高なものに対する畏敬の念，人間とは素晴らしいものだという感動は，スポーツが代替していると見ることができる。オリンピックの熱戦に何故こんなに引きつけられるのかといえば，ナショナリズムと一体化して日本チームの勝敗に関心を寄せたり，プレー技術のすばらしさに関心を寄せていることもあるが，我々はそれ以上にスポーツの中に，必死に努力したり困難に耐える人間の美しさや肉体の極限的なすばらしさ，さらにそれらを凌駕する運命の不可思議さとでも言うべき神々しいもの，聖なるものを見て感動しているからである。今や我々の日常の中で肉親の死や子どもの誕生といった私事性を超えて，一喜一憂したり涙を流すほどの感動をさせてくれる，かつての宗教に替わる装置がスポーツなのだといってよいかも知れない。その様な興奮や感動は人間らしく生きていく上で，人間性の活性化に不可欠なのである。石井(1995)は身体感覚の欠落しがちな近代の文化のなかで，スポーツが身体を通して人間の尊厳を教えたり，「癒し」たりする機能を持っていることに注目している。

また，新渡戸稲造が『武士道』で述べるように，人間の生きる方法，具体的な生活の仕方を精神的に規定するのが宗教であるとすれば（新渡戸稲造では「武士道」），今や教会や寺院の説教や教え，あるいは武士道に替わるそのような精神的な規範はスポーツの中で教えられているのではないかというのが私の見方である。この二つの意味で今やスポーツは世俗化された宗教と呼ぶことができるのではないだろうか。

（5）時間吸収機能

最初に述べた「長い時間」の吸収装置としてもスポーツの果たす役割は優れている。スポーツは「おもしろい」し，またさまざまな体系の階梯を少しずつ登り詰めていくことで，その世界は無限に深く広がる。これは宗教的な機能と相まって，例えば俗に言う荒れた学校ほどスポーツ部活動に力を入れることの深部の理由である。

（6）抑圧の解放

エリアスとダニングが述べるように，スポーツは抑圧を解放する社会的な文化装置である。しかも抑圧が強い社会即ち文明化の進んだ現代社会ほどその抑圧の解放には「より緊張した興奮」が必要になる。これまで生涯スポーツは年齢や性，体力や技能レベルでのみ考えられてきたが，これに加えてその人がどのような文明化の抑圧を受けており，その解放のためにどのようなレベルの「緊張した興奮」を必要としているのかの判断も加えられるべきであろう。高齢者が必ずしも運動強度や競技性の低いスポーツばかりを欲しているとは限らないのである。

3　生涯スポーツ推進のための六つの条件

さて，こうした生涯スポーツ事業を展開していく際に留意すべき六つの条件についてごく簡単に示しておこう。(ア) 時間（暇）の確保，(イ) 金（経済的なゆとり），(ウ) 技能を身につけること，(エ) 人の確保（指導者・仲間・相手），(オ) 施設・設備・用具の確保，(カ) 精神的解放である。

スポーツを行う上で必要なものは，先ず時間（暇）である。スポーツの対象者の職業や年齢，労働形態によって異なるが，いずれにしてもスポーツを行う時間的ゆとりがあるかどうか，それはいつかが問題にならねばならない。

第二に，スポーツを行うにはそれなりの経済

的な負担ができるゆとりが必要である。施設や用具を使用する，購入する，あるいは指導を受けるためにはその負担が伴う，スポーツのサービスは無償で受けられるのではないことの認識はもっと深められねばならない。

第三に，スポーツのおもしろさを味わうためにはやはり技能が必要である。技能は系統的な練習を伴うことが多いために，計画的な習得の機会が工夫されなければならない。この点で生涯スポーツの概念を持った組織が，学校体育や競技スポーツ推進，青年期のスポーツや婦人のスポーツ，高齢者のスポーツを統合する必要があるだろう。

第四，第五は言うまでもないことであり説明を省く。第六は，スポーツをすることが，何か遊んでいるような後ろめたさを感じるようであってはこれに取り組めないし，また職場の上下関係や地域社会の秩序など日常の生活規範を持ち込んではスポーツにならないのである。

4　スポーツと体育

ついでに日本ではスポーツと体育が混同されていることにも言及しておこう。既に述べたようにスポーツの訳語が公的にきちんと示されなかったこと，スポーツが主として学校を中心になされてきたこともあって，混同されやすかったのかもしれない。が，体育とスポーツは今後次のように区別して考えられていくべきであろう。すなわち，体育というのは physical education，つまり「身体育成」と「身体（を通しての）教育」の意味であり，教育の概念なのである。教育というのは「人格の完成を目指し」行う営みである。身体の育成もさることながら人格の完成というのは本来的には理性や感情のコントロールによって社会的に適合できる人間を言うのであり，その意味で「文明化」された人間のことである。いくらある生徒がサッカーがうまくとも，授業の中で誰にもボールを渡さずに一人でドリブルしてゴールをするならば，それは教育的に許されまい。それが教育であり，体育の授業である。一方，スポーツはお分かりのとおりそうではない。教育に利用できる要素もあるが，そもそも教育とは無縁な世界の概念なのである。それはちょうど映画と教育映画の関係に例えられるかもしれない。映画には殺人やら喧嘩やらの暴力シーン，犯罪シーン，露骨な性描写などがしばしば登場する。人間の究極の姿を設定して描くことで人間とは何か，社会とは何かを追求するためである。一方文部省特選教育映画はこうした赤裸々な人間描写は避けて，教育上望ましい素材だけを精選して映画にする。文部省特選映画がえてしてつまらないのはそのためである。こうした違いがきちんと認識されないまま，日本ではクラブスポーツや国民体育大会，甲子園野球大会が教育化されたり，逆に授業がスポーツ化されたりしているのである。スポーツマンが立派な人格を持ち公正である場合もあるが，そうでないことも多いことは常の人間と変わるところはないのである。むしろ往々にして目に見えない形で集団的ルール違反をゲーム化することは大学の定期試験を監督した者には常識なのである。

このような歴史的経緯から，生涯スポーツの内容や形式を現在の日本のスポーツ状況を出発点にして考え始めると，いくつか問題が出てくる。例えばスポーツというと外国から入ってきたカタカナの身体運動文化，つまりサッカーとかハンドボールとかの出来合いのスポーツ種目ばかりが思い浮べられること，かなり強い競技性が感じられること，真剣に真面目にやらねばスポーツでないかのように受け取られることなどである。生涯スポーツというとすぐゲートボール，ペタンク等などが出てくるのもその名残であろうが，日常の抑圧からの解放というスポーツの本来の意味，そして身体運動を伴った優劣を競い合う社会的な文化装置をスポーツと呼ぼうという近年の動向を考え合わせると，例えば綱引きや御輿かつぎ，あるいは山菜取りなどもその視野に入ってくることになる。スポーツとは現在考えられているよりははるかに多様

に考えられるべきである。その意味で，sportの新しい訳語として「おもしろ」は検討に値する。とりわけ「生涯おもしろ」は「生涯スポーツ」に比べてはるかに具体的かつ新鮮であるように思う。

なお，日本のスポーツを構築していく上で，柳田邦男の論も検討の余地があるだろう。柳田邦男は日本人の民族的な楽しみや興奮の特性を宗教的なバックグラウンドでの一体感に見いだして次のように述べる。

「我々はもう気が付かずにいるが，多くの競技（我が国在来の祭礼と結びついた運動競技，すなわち相撲，競馬，綱引き，的射などを指している：筆者注）の興奮の中には，今もまだ世界共通の心理学だけでは，理解し得ない部分があると思ふ…煎じつめていくとチャンス即ち隠れたる外の力，人が詩人風に運命の神のほほゑみなどと言はんとするものを，我々日本人は氏神の御ほほゑみと感じて居た時代があり，又その考へ方は今も少しは続いて居るのである。今日贔屓とか応援とかいふものが，まだ痛切に其必要を認められて居るのも，やはり同じ一種の宗教的共感の延長であるのかもしれない。」（日本の祭り，柳田国男集，17巻，244-245頁）

日本的な生涯スポーツの形態を考える際，無視できない説ではないだろうか。

主たる参考文献

岡本包治・山本恒雄編，生涯教育とは何か，ぎょうせい，1992年版
日本近代教育史事典編集委員会，日本近代教育史事典，（第2刷），平凡社，1971年
マッキントッシュ（加藤橘夫,田中鎮雄共訳），近代イギリス体育史（改訂増補版），ベースボール・マガジン，1973年
カートミル（内田亮子訳），人はなぜ殺すか，新耀社，1995年
三浦雅士，身体の零度，講談社新書メチエ，1994年
増川宏一，賭博一，二，法政大学出版局，1980年
ミシェルフーコー（田村俶訳），監獄の誕生，新潮社，1977年
ノルベルト・エリアス，エリック・ダニング（大平章訳），スポーツと文明化，法政大学出版局，1995年
今村仁司，群衆：モンスターの誕生，筑摩書房，1996年
寒川恒夫，図説スポーツ史，朝倉書店，1991年
石井誠士，癒しの原理：ホモ・クーランスの哲学，人文書院，1995年
カイヨワ（清水幾太郎・霧生和夫訳），遊びと人間，岩波書店，1970年
福島章，ヒトは狩人だった，青土社，1991年
多木浩二，スポーツを考える：身体・資本・ナショナリズム，筑摩新書，1995年
中村敏雄，スポーツの風土，大修館書店，1981年
川原栄峰，ハイデッガー賛述，南窓社，1992年
川原栄峰，ハイデッガーの哲学と日本，高野山大学，1995年
柳田国男，日本の祭り，神幸と神態，定本柳田国男集（新装版第13刷）第17巻，筑摩書房，昭和51年（初版昭和44年），244-245頁